第152号
発行所　上高井教育会
発行人　上高井教育会長　市村　聰
編集人　会報編集委員長　滝澤祥匡
印刷所　須坂新聞社

研究委員会中間報告

本年度からの「子どもにとって、わかり、魅力ある授業のあり方」という新しいテーマのもと、四月以来、各研究委員会ではさまざまな教育研究がなされてきました。各委員会では、現在どのような課題をもち、成果が得られてきているのか、後半に向けて中間報告をしていただきます。

わかる・できる喜びをどの子にも

研究委員副会長　北島　秀樹

本年度、研究委員会は「子どもにとって、わかり、魅力ある授業のあり方」と全体テーマを新たにし、講師も長い間指導いただいた三枝孝弘先生から谷川彰英先生に替わり、課題の究明をしていくこととなった。

昨年度の研究委員会のまとめと課題を振り返ってみると、本郡の授業研究のよさとしては、①子供の学ぶ意欲を引き出そうとする授業②身近な素材の教材化を図る授業③体験学習を重視し、楽しい活動のある授業④その子らしい追究に着目した授業感が見られるが、反面、懸念として感じられる点は①教材研究を深め、子供の反応や学習の深まり、基礎的・基本的な内容の定着への見通しが持てる授業になっているか、②子供自らが課題を持ち、その解決に向かって思考を練り上げる授業になっているか、③子供が共に学び合い、学びがいを感じ、喜びのもてる授業になっているか、等であった。

そこで本年度は、基礎的・基本的な内容を重視した教材研究、具体的な指導・援助と評価、子供の学びがいや喜びのある授業の創造に焦点を当てた研究内容を設定し、子供がわかる・できる喜びのもてる授業への改造を目指して、歩みを進めた。

第一回研究日、七月四日(土)、谷川先生をお招きして墨坂中で社会科が行われた。授業は一年生。単元「奈良の都と東大寺」の中で、資料を通して農民の実際の姿を理解し、律令制国家を見返していくもので、若い先生らしく瀲剌としたものであった。

谷川先生のご指導の主な点は、(1)「構え」はできており、教材の着眼点はよい。(2)「計画性」については授業には段階があり、5つを越えると纏まりにくく、導入が次の活動の伏線になっていたか。(3)具体的で、答え易く繋がる「発問」になっていたか。(4)「資料」提示と発問はセット。(5)分かる板書に。(6)教師の「出」は積極的に出て、子供が動いたら手を休め、動きを見て褒める等々、実践的であった。

研究日(2)に向けて、子供がつまずき、選択・決断し、追究、見返す場に立たせ、どの子にもわかる・できる喜びを持たせる授業を指向したい。

（須坂小）

〈提言〉

仮説としての主眼を

研究委員会長　冨澤　慶吉

谷川先生は楽しく学べる優れた授業の条件として、(1)良い教材、(2)計画性、(3)授業の技術、(4)構えの四つを上げておられるが、(2)の計画性つまり指導案について、特に一時間の授業構成を決定づける主眼について私見を述べてみたい。

最近の授業研究で不思議に思うことは、それを見ただけでどんな授業が展開されるはずであるか明確に示されてあるべき主眼について、ほとんど言及されないことだ。研究が進んだ今、そんな初歩的なことは当然のこととして問題にされないでいるとしたら、大変に憂慮されることだ。

授業の構想は、まず子どもとの構えがあって、同時に良い教材のひらめきが発せられ、その係わりで計画が具体化されていく。そこに自ずと伴ってくるものが技術であるように思う。一時間の構想はそれらのすべてが集約されて、主眼に明示されてくる。

主眼は一時間の学習成立の仮説である。そこには中心的な活動は何か、その活動を通してどんな力が身につくのか、その結果どういう姿になるはずなのか、これらの三つがきちっと据えられていなければならない。つまり、活動・つけたい力・評価の三要素が明確に記述されるように、形式を整えることが大切だ。私は

ここがなおざりにされていると授業研究は決して深まらないと考える。授業は主眼に始まり主眼に終わるとまで考えたい。主眼をよくつめてなく、お題目のように掲げておいて、実証の観点について論じてみても本末転倒と言わざるを得ない。中心的な活動の中でその力が本当につくのか、力がつくにはどういう内容と活動を設定しておくべきなのか、そして確かに身についた力を子どものどんな姿から確めようとしているのか。仮説であるからにはそれらのことが明確になっていなければ実証の観点がきめ出されるはずがない。今、仮説としての主眼を見直すことを提言したい。

（墨坂中）

教育会だより

10・6　上高井教育研究集会　於相森中
10・18　上高井郡市PTA連合会研究集会　於須坂小
10・19　第6回常任委員会
10・22　教育課程研究協議会
10・23～25　第44回日本連合教育会長崎大会　本会より4名参加
10・27　第7回代議員会・信教各種研究調査編集委員中間報告会(2)
11・10　上高井教育会報第152号発行
11・19　秋の講演会　於須坂市公民館
○演題「新時代の信州教育」―伝統の継承と創造を求めて―
○講師　山梨学院大学教授　宮坂広作先生
11・20　全県研究大会　於栗ガ丘小　本会より89名参加
11・21　第7回常任委員会
11・25　教育会中間監査　第4回青年教師の集い　於信濃教育会館
11・28　第2回研究委員会
12・7　第14回郡研究発表会　於須坂小　視聴覚室
12・8　第8回代議員会・信教各種研究調査編集委員中間報告(3)
第13回郡女教師研究大会　於須坂小　視聴覚室
上高井教育会報第153号発行―第14回郡研究発表会・第13回郡女教師研究大会特集―

る授業を求めて
会中間報告

生活科

市川　和恵

研究テーマ
「ひとりひとりの子どもが喜んでひたりこみ、自らを深めていく指導はどうあったらよいか」

自立への基礎を養う生活科ってどういう教科なのだろう。単元展開や授業はどうあればいいの。先生はどうしていればいいの。と、教科としての特徴を摑むことから始まった迷い歩きの四年間が過ぎ、今年は、完全実施の年になった。

今まで実践の中の子ども達の姿から、わたしたちは、「子どもは、試行錯誤しながら夢中になってその活動に没頭する中で、多少の失敗や困難は、自らの力が解決し乗り越えていくこと」また、「チャボさんやカエルさん、アサガオさんなど、生命あるものに思いをかけ、思いを内にこめて生きるとき、思いがけない感動に出会い、相手への思い（関わり）を一層深め、広げ、ときに、改めていく自分になっていくこともあるということ」など気づかされてきた。

そこで、私たちは、子どもの内から湧いてくる「面白そうだな。やってみたいな。」といった願いが、「ああでもない、こうでもない。」といった活動の場で、「できた」「わかった」のような喜びや成就感を味わうことになり、自信と「もっとやりたい、こうしてみよう」という意欲を持つことになり、このことが、自ら生きる力（知恵）を身につけること即ち、生活科でねらう、自立への基礎を養うことといえるのでないかと考えるようになった。

本年度第一回目の授業は、須坂小・鈴木雅子先生に「わたしたちのだいず畑」という単元で「かかしさんへの感謝とお願いなど、ひとりひとりの思いから生まれた『かかしさんありがとう、これからもがんばってね会』の、おみこしやうちわなどを作る活動に、自分の願いをもって浸りこむことができる。」というねらいを持って実践していただいた。子ども達は、それぞれの願いごとに①おみこしグループ②大うちわグループ③かかしの家グループ④はっぴグループ⑤踊りグループ⑥かかしの修理工場グループの六つのグループに分かれて活動した。子ども達の姿は、様々であった。口数も少なく、おみこしに貼る折り紙は、切り込みを入れると角が貼りやすいと気づいて糊づけしていた子、先生の温かい助言で気をとりもどして元気にはっぴの色ぬりをした子、友と関わり合って楽しそうに家づくりをした子、何度も何度もテープをかけて、浴衣とぞうり姿で、即興的な踊りを楽しんでいた子等々。

研究会では、教師があちこちの班や子どもたちに、めまぐるしく対応していたので、子どものよい気づきや育ちをみつけることができにくいこと、また、ニスの濃さや量、はけの準備など、子どもの活動の見通しを持った援助のあり方の難しさなどが指摘された。講師の中島瑞枝指導主事先生からは、生活科を理解した上で見通しを持った研究が進められてきていること、プランターに大豆を育てて教室に置いたり、活動経過のわかる掲示物があるなど環境設定の良さ、鈴木先生の子どものとらえの良さなどおほめいただいた。そして今後の為に、子どもの願いを中心に進め、ねらいが達成できるか吟味すること。子どもにとってもっと工夫させることの大切さ、授業の組立をどうするか等ご指導いただいた。（仁礼小）

自己を見つめ 自己のあるべき姿を考える

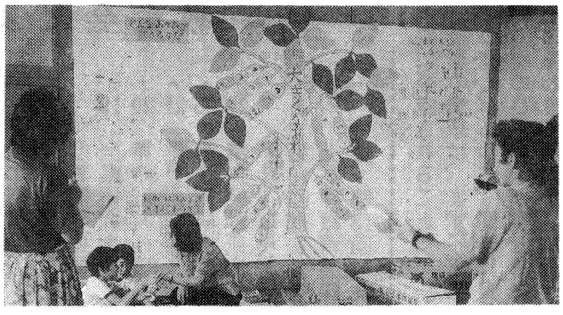
牧　康夫

道徳研究委員会では「子どもが道徳的問題に自ら気づき、望ましい生き方を求めつづける学習のあり方はどうあったらよいか」をテーマとし、基本的には、各学校の研究を主体に、具体的なテーマを設定し、研究することにした。

今年度から郡の全体テーマが「子どもにとって、わかり、魅力ある授業のあり方」となったが、これを見とおしての研究をしていこうとするものがある。

研究の深め方は、次の三点をその視点としている。①基礎的、基本的内容としての内容項目を重視していく。②二回の研究会を持ち、子どもが道徳的問題に気づき、自己を見つめ、自己のあるべき姿にめざめ、より望ましい生き方を追求していけるような、学ぶ喜びのもてる授業のあり方を究明していく。③授業校の研究の方向をつかみ、互いに各自の学校で実践したり、情報をもちよりながら研究していく。

第一回研究委員会は、さる七月四日（土）、豊洲小学校で行われた。同校の道徳研究テーマは「一人ひとりの子どもが自己の体験に呼応させながら、道徳的価値を追求していく学習はどうあったらよいか」である。授業は、三年竹組・伊藤千鶴先生による指導で、主題名「のぼりぼう」（1―(3)　忍耐・努力）、本時の主眼は、「のぼりぼうにのぼれるようなった〝わたし〟の行為と気持ちを考え合うことを通して、自分で自分を励ましながら、困難なことをやり遂げたよさに気づき、自分のめあてに向かってがんばろうとする意欲をもつことができる。」であった。



展開は、導入・展開（前段後段）・終末という段階をとっている。

学校・学年・学級の指導計画がきちんとできていて、その上にたっての本時の指導である。指導の仮説では、新しいことや楽しいこと、友達と一緒であったりすると意欲的に取り組めるが、めんどうくさくなり、あきらめたり、最後までやり続けることがなかなかできない子どもたちに、今がまん、ここがまんとめあてに向かってねばり強くがんばる〈わたし〉の資料「のぼりぼう」（信教）で、①～⑨の場面を考えて指導すれば、自分のめあてに対しての願いをふくらませながら、今までよりもねばり強く取り組んでみようと意欲を高めるようになるであろうというものであった。導入では、明るい話題を体験に呼応させながら、多くの種類の経験が出てくるよう発問し、資料の分析をもとに、わたしはどうしてのぼれたのだろうと、授業計画を細かくたてて授業が展開された。「自分に言い聞かせてやっていきたい。」「できないからやめたいといわないでがんばりたい。」伊藤房光指導主事先生から「自分だったら」は呼応させる上で大切。価値への自覚はよかった。とご指導いただいた。第二回は、墨坂中学校である。（小山小）

わかり、魅力あ

研究委員

「妙徳山に向かって歌おうよ」

小林　雅彦

音楽科では「美しい表現をめざして粘り強く学習することどもに育てるにはどうしたらよいか」というテーマをかかえて本年度の研究がスタートした。特に本年度は音楽科の共通した課題である「基礎的な力を無理なくつけながら表現を高めるための工夫」に焦点を当て、研究日には高甫小の木内先生と五年敬組の授業から学ばせていただいた。この日の中心の題材は「ゆかいに歩けば」であった。この曲を「楽しそうに声を響かせて歌いたい」と願ったこども達にスタッカート唱とレガート唱の対比による歌い方で表現させたかった。

最初のうち固かったこども達であったが、彼らの声や表情は木内先生の次の発問で大きく変わった。「ねえ、みんな。こっちにきて妙徳山に向かって歌おうよ。」今まで机を前にして黒板に向かって歌ってきたこども達は、一斉に先生のそばに走り寄った。先生は、音が段々高くなるにつれてのどをしめて歌いがちになるこども達に、声を届かせる目標物を決めさせ、それに向かって手の動作を入れながら歌わせた。低い音の時は山のふもとを、高い音になるにつれて目標も高くなり、曲の頂点では目標も山の頂上にあるのであった。笑顔や歓声の中、こども達の声があっという間に明るくなっていく。あれだけ「ホホとマユを上げて歌うんですよ。」と言ってもできなかったのに、今、妙徳山に向かって嬉々として声を出している一人ひとりのホホとマユは確かにしっかり上がっているのである。日頃、つい「ホホとマユを上げて！」と無機的な指示を出しがちになる私たちにとって、大きな刺激が与えられた発問であった。

なお、お若い木内先生を力強く支えていただき、私たちの研究に力をお貸しいただいた高甫小学校の先生方に深く感謝いたします。（相森中）

きっとぼくの考え　うまくいくぞ!!

石井　光男

全体テーマを受け、当委員会では「新しい知識や概念」「問題解決能力等」を「子どもたちが共通課題に沿いつつ、問題意識を持ち続けながら自分の仮説を観察実験を通し検証し獲得すること」と受けとめ、「喜びを持って追求し、自分なりの問題解決能力を伸ばす学習のあり方」とテーマ設定し追究している。

児童・生徒の実態が最も大切な条件となるので、授業校の先生方も小委員会に参加していただき、授業校の願いを解決する方向で、実態に基く具体的なテーマとそれにかかわる教材研究の吟味、仮説実証授業を通して究明を試みる。

第一回は、長野教育事務所指導主事吉川弘義先生を講師に、仁礼小学校四年生伊賀雅志先生に授業をしていただいた。自分なりの考えで調べぬく意欲や問題解決能力、発見や気づきへの不足という児童の実態から、「興味感心を持ち、自分なりの考えが持て、具体的な操作を通しながら、自分の予想が検証され、その過程で、反省的思考が容易となる追求過程を仕組めば？」ということから、「子ども自ら予想・発見・気づきのもてる『てんびん』の学習」を副題として実証を試みた。

この学習は、既習での知識を使った追究ができないので、どうなるか発見してみようという展開から、獲得した知識を使いながら新しい課題を追求する学習過程を仮説した。本時は水平につり合う支点探しから均一な棒での支点とつるすおもりの関係を学習後、不均一な棒での「太さのちがう棒に、同じ重量のおもりをつるしつり合う場所調べ」を学習課題にすえた。ひとりひとりの、ある子によっては三つも考えるなど、吟味された予想や探究法を大切に個人実験を中心に展開された。「ぼくのはぜったいうまくいくぞ…」とつぶやく子、どの子も本気であった。第二回は、小布施中学校で、テーマ追求に向けて実施する予定である。（森上小）

図工・美術

田中　義人

本年度のテーマは「子どもたちがイメージを豊かに広げながら、喜んで造形表現できる指導のあり方はどうあったらよいか」である。児童の心情に寄り添い題材を決めだし、具体的な指導の手立てを通して、児童が自分の課題に向かってどのように自己表現にかかわって行ったか、具体的な姿でとらえようとした。

第一回は日滝小学校において正木あや先生の構想画「蜘蛛の糸」（六年）の授業研究会が行われた。

物語りによる構想画の指導では、文学的なイメージを絵画的・造形的なイメージに置き換えて表現する。物語や民話の感動の中心的な場面を何枚かのラフスケッチをして、イメージを煮詰めて形象化する。そこへ彩描し仕上げるのが普通の学習過程である。

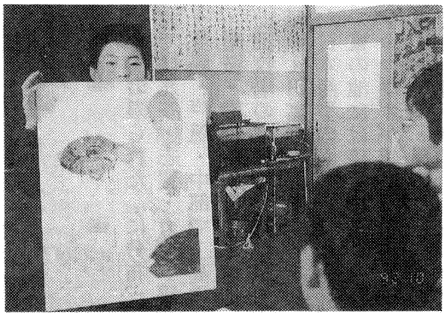
しかしこの指導では、児童の自己の投入が不足し、傍観者的な月並みな表現・説明的な表現になり易いことが心配されている。そこで、第一回はこの学習過程を工夫した授業を仕組んだ。

物語より受けた新鮮なイメージを、種々の技法（擦り出し・ぼかし・引っ掻き・筆転がし・絵の具吹き・デカルコマニー等）を駆使し、まず、色彩によるラフスケッチをする。それによって、醸し出した色彩によるイメージを、深め焦点化をする。その色によるイメージの中に形象を入れて行くといった学習過程である。新鮮でその子独特な画面構成がなされ、情感豊かな表現が出来る学習過程であった。

研究会の講師は本年も、森山明治先生にお願いし、適切なご指導を頂きながら研究を深めることが出来るのはたいへん幸せなことである。

森山先生が一人ひとりの子どもの表現をどのように読み取ったかを示され、過程に応じたご指導を頂き、子どもたちの欲求による師範の大切さなど多くの課題もいただいた。

次回は相森中で研究を深めたい。（須坂小）



火ばち談義

小さな窓から

松岡香代子

秋風というには少し涼しすぎる風の吹く中で、初めての運動会を終えた一年生。あやしげな雨雲が去り、青空がひらけてきた頃、空を見上げた子が

「あっ見て。雲が動いてる。」と驚いています。それを聞いたお友だちも一緒になって、空を流れる雲に指を合わせてじいっと追っていました。

その光景を見て、私も子どもの頃、同じように指で雲を追った事があったっけ…と思い出しました。

一年生と過ごして、子どものつぶやきに、はっとしたり、納得させられたりする事が、度々あります。

―学校っていくら?―

入学当初、給食前のひと時、附に落ちぬ顔つきで私のところへ来たH君が言うのです。

「先生、学校っていくらで買えるの。」

突拍子のない質問にたじろぐ私をよそに子ども会議が続きます。

「10万円ぐらいじゃない?」

「もっとだよ、百万位だよ。」

討論を聞きながら、頭の中で電卓をはじく自分が情けない。

―牛乳びんの音って…―

「先生も聞いてみて!」

と、私の耳に洗った牛乳びんをあててきたS君。

「わあ、海の中の音みたい。」

と喜ぶ私に、口をとがらせ、

「違うよ。牛乳を入れた時の音がくっついているんだよ。」

―あの山のむこうは…?―

東の山々をしみじみ眺めていたH君。

「先生、あの山のむこうも日本なの?」

H君は、山のむこうの世界をどんなふうに思い描いているのか、それを考えると私までうきうきしてきました。

子どものつぶやきが小さな窓となって、子どもの世界をのぞかせてくれます。これからもどんなつぶやきがきけるのか…楽しみです。

(栗ガ丘小)

Mさんの話

脇坂幸光

この夏、Mさんという方のお話を聞く機会があった。Mさんは県内の盲学校の卒業生で先天性の視覚障害者(全盲)である。しかし、一般企業に勤め、一人暮らしをし、自立しているお嬢さんである。

Mさんは首都圏の大きなデパートで電話交換手として働いている。必要な電話番号はすべて点字に直してから記憶してしまうという努力家である。新しい仕事内容が書類として出されると、それも点字に直して、すべて覚えるという。本当に生き生きと自分の仕事の内容について話してくださった。とても明るく穏やかな人であった。

そんなMさんの話の後で、「仕事をしていて困ることは何ですか。」という質問が出た。Mさんは、「デパートの売り場を歩く時に白い杖を使わせてもらえない。そのためトイレに一人で行けず、必ず同僚に付き添ってもらわなければならない。また、仕事場で何か失敗があると自分のせいにされる。それは、いくら頑張っても、あの人は目が見えないから何もできないと、いまだに思われているからだ。」と、答えられた。

ハンディに負けまいと、常人の何倍も努力している人がいることを知るとともに、誰でも思っている以上の力を持つ可能性のあることを感じさせられた。また、この程度しかできないだろうという自分の枠で人に接することはなかったかと、反省させられた。

これからどうしたらいいのだろう。何ができるのだろうと考えさせられた。(豊洲小)

怪我の功名

伊東基安

突然の原稿の依頼。書けることといったら自分のことしかないのに恥いるばかりでありますが、ま、暇つぶしにでもなれば幸いです。

幼い頃から厚顔というか無恥というか、あまり人の思いに頓着せずに、のほほんと育ってきたので、それなりの友達の中で(友達には甚だ失礼ながら)さしたる苦労もせず「僕は友達は多い方だな」などと密かに自負して、勝手気ままにやってきたように思います。

ところが、このいい加減さが災いしてか、平気で負の評価ばかりしてきたためでありましょう。なんと学級の女生徒達から総すかんをくうという羽目に陥ったことが二度もありました。

いつものとおり仕事をしようとするのですが、やる気になれない。「ま、明日やれば」と、どんどん怠惰になり、締切を過ごし、こうなると増々気力が失せ、愚痴と溜め息という毎日が続きました。

根が呑気というか、こうなって、はたと気づきました。これが心のエネルギーであり、不登校の生徒や、いじめや差別の中にいる人の思いだと。情け無い話ですが、もう一つ実感できなかった心情が解ったように思ったのです。

そして、学級のM子の連続の欠席。「ひょっとすると。」案の定、仲の良かった友達にすげなくされて心のエネルギーはなくなっていました。

その時腹痛を理由に休むM子をどうしてもせめる気にはなれませんでした。(高山中)

須高の自然⑪ 山田牧場のモリアオガエル

堀米富平

写真は山田牧場東の池のモリアオガエル卵塊である。池の上の木の枝や池辺の草むらに産卵する。ふ化幼生は池内に落下育成する。本年七月十六日に見事な卵塊が見られ、成体が牧場内小川に見られた。

県内の限られた地に分布、北では北安・志賀・カヤノ平・苗場・戸隠・中部で上高地・乗鞍・南では下伊・木曽で、山田牧場のは背に赤褐色斑皆無ゆえ日本海を回り志賀を経た日本海型のものと見てよい。

東の池には停水棲クロサンショウウオが棲息、幼生を捕食する。茶・黒のシマヘビも池辺に胴を伸ばしてねらっている。

一匹の雌が握りこぶし大に白泡状の卵塊を生み、雌へ数匹の雄が抱きついて放精する。

(高山小)

編集後記

紅葉も盛りを過ぎました。澄み切った秋空がもうしばらく続いてほしいものです。

今回は、研究委員会の中間報告を中心に編集させていただきました。お忙しいところ快く、しかも、的を得た原稿をお寄せいただいた先生方に心からお礼を申し上げます。

(花形・勝山)